乱歩賞作家書下しシリーズ

森村誠一

密閉山脈

乱歩賞作家書下しシリーズ

森村誠一

密閉山脈

講談社

乱歩賞作家書下しシリーズ
密閉山脈　定価　七八〇円
昭和四十六年二月二十四日　第一刷発行
昭和五十二年十月二十四日　第五刷発行
著　者　森村誠一
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二-一二-二一
郵便番号　一一二
電話　東京(945)一一一一(大代表)
振替　東京八-三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© 森村誠一　昭和四十六年

Printed in Japan
0393-136525-2253 (2)　(文2)

目次

美しき遭難者……五
八ヶ岳行……一一
魂の香煙……一七
駄獣の将来……四七
婚前山行……五五
闇の沈黙……六三
燃えつきた〝夫〟……七七
不運な遺品……一〇一
虚無の充塡……一一五
ヘルメットの矛盾……一二六

高峰の密室……一四一
分骨の陥穽……一四五
アルプスのアリバイ……一五八
動機なき容疑者……一七八
単独登攀者の死……二〇〇
殺人山行……二〇九
実験登攀……二二七
多重電飾……二四一
ヒマラヤの星……二四六
明日なき孤独……二六七
森村誠一氏素描　中島河太郎……二八二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

密閉山脈

装画

生沢　朗

美しい遭難者

1

影山隼人と真柄慎二が赤岳頂上を経由して真教寺尾根上部の岩場を通過したころは、山は完全な悪天の中にあった。

朝から頭上をおおっていた高層雲は、次第にその厚味をまして、笠雲状に変化していた。雲の上に磨りガラス越しに見るようにボヤンと光を失っていた太陽は、笠雲の中に完全に包みこまれて姿を消していた。

風も強まり、稜線を吹きぬける風音は湿気を多く含んでいるせいか、高音の口笛のように澄んでいる。

空は灰色からうす墨色に変り、これから下って行くべき山麓は層積雲に埋まり、漠々たる雲海をつくっている。その雲海の波頭が時々山腹をせり上がり、ガスとなって稜線上をかすめ去る。

先刻までかすかに雲海の上に浮かんでいた南アルプスが尾流雲の底へ沈んでしまっていた。山は上下両方の雲のはさみ撃ちにあいながら、悪天の中へ転がりこんだ。典型的な低気圧の接

近による気象の変化である。
気象通報も、冬型の気圧配置のゆるみに乗じて東支那海に発生した低気圧の、太平洋岸への接近を報じていた。たとえその勢力が弱くとも東海道沖を通過すると、三千米級の山は暴風雪にみまわれ、新雪雪崩の危険が非常に高くなる。
トランジスターラジオの報じる低気圧は、かなり大型のものであり、その進路も〝大雪型〟だった。
影山と真柄が、夏沢峠から主峰赤岳を経て権現岳へ至る本峰群縦走の計画を放棄して、真教寺尾根から清里へ逃げようとしたのは、この異常に速い低気圧の接近によるものであった。
昨日一日の穏やかな晴天が、低気圧が発生して、冬型の気圧配置が弛んだせいであることはよく分っていたが、おたがいに勤めに縛られめったに休暇の取れない多忙な身であったうえに、よもや低気圧がこんなに速く進んでこようとは思っていなかったので、強引に出かけてきたのである。それに二人とも岳界でも先鋭をもってなる社会人登山団体の主力メンバーでもあり、外国山系体験者でもある自信と驕りから、悪天の迫った八ケ岳に対するみくびりがないでもなかった。
「こりゃ危いな」
しかしさすがベテランの登山家だけあって、縦走中に雲行きの慌しい変化に、この低気圧の異常な速度と危険な進路に気がついた。現在東海道沖を東へ向って進んでいる低気圧が、東経一四〇度線を通過してから進路を北東に転ずると、気圧配置が冬型となって本格的な悪天となる。せっかく春めいた山は、ふたたび冬のよそおいにたちかえる。
「これは下りた方が無難だぞ」

さすがベテランだけに決断は速く正確だった。尾根上部の岩場は冬の凍結につづく、春の低気圧の接近による気温の上昇で岩がゆるみ、その通過に意外に時間をとられた。

夏ならば何でもない一般コースにてこずらされて、ようやく悪場をふり切った時には、稜線は雪と霧のうず巻く乱層雲にとらえられ、視界が極端に悪くなった。

「おい、急ごう」

先を進む影山が後続の真柄に声をかけた。そんな声をかけなくとも、二人の足は最高に速められている。影山の声は天候と競争するための一種の気合である。

「おう」

と答えた真柄が、もっと馬力を上げようとした時、「おや?」と今声をかけたばかりの影山が足を止めた。

「どうした?」

危うく影山に突き当たりそうになった真柄がたたらを踏んだ。

「誰か倒れている」

影山が風雪の密度のむらの間隙を凝視しながら言った。

「誰か倒れてるって?」

「女らしい」

「女!?」

「あすこだ」

影山は前方のハイマツ帯を指さした。しかしその時一団の濃い霧によって二人の視界は閉ざされてしまった。

「とにかく行ってみよう、どうせ通り道だ」
影山は言いながら厄介なことになりそうな予感がした。この悪天の中では一刻も早く安全帯まで降りつきたい。経験豊かな二人であったが、岩の脆い痩せた稜線で悪天に叩かれるのは気持のよいものではない。内陸の山ではあっても、風雪となれば厳冬期と変らぬ様相を呈する三千米に近い八ケ岳の稜線である。その峻烈さは、北アルプスにも劣らぬことがある。
今や岳が明らかに剣き出した牙から、全力をあげて逃れようという矢先に、遭難者、それも女となると穏やかにはすみそうもない。

2

影山が発見した遭難者?は、森林帯が終って、岳樺やハイマツの点在する尾根の斜面の登山路から少し外れた台地の、小さな岩の突起のかげに倒れていた。
「スカートを穿いてやがる!」
影山がいまいましそうにつぶやいた。荒涼たる灰色の視野の中に、その倒れている人間がまとった薄いピンクの布片は、〝下界〟で眺めれば大して華やかな色彩でもないのに、周囲から切り離されたように浮き上がってみえた。ゼロに近い視界にもかかわらず、影山の目がとらえたのは、この周囲になじまぬ〝異色〟のせいであろう。
春とはいえ、山はまだ冬姿である。原生林の吹きだまりには残雪が背たけほども積り、今彼らが降りてきたばかりの高所の岩は、雪と氷でかたく武装している。大体都会の舗道を歩くような軽装でくる場所ではなく、またここまでこられたのが、不思議なくらいである。
これで彼女が遭難者であることが確定した。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

ともあれ二人は、遭難者のそばへ駆け寄った。ピンクのワンピースを着た二十歳前後の若い女だった。唇まで紙のように白くなった女の顔に、ぬれた髪がへばりついて水死体のようだった。そばに持ちものらしい、小型のハンドバッグと、手さげ袋が転がっている。

「まるで自殺だな」

影山が諦め切った顔で女の心臓に耳をあてた。

「おい、まだ生きてるぞ！」

影山は次の瞬間、物音に愕かされた子供のような目をした。

「生きてるって！」

真柄も表情を浮かべた目を女に向けた。

すでに瞳孔は拡大し、呼吸困難な状態にあった。このまま放っておけば確実に死に至るきわどい状態である。しかし瞳孔の対光反射もかすかながらあるし、何よりもありがたいことに、筋肉が硬直している。これが硬い間はまだ救かる見こみがあるのである。

この場合、四十度ぐらいの風呂に入れるのが一番効果があるのだが、この場所ではそれは不可能である。幸いそこは、岩のかげで風当たりも少なかったので、二人はその場で応急手当をすることにした。山行には必ず携帯する強心剤を真柄がなれた手つきで注射すると、二人で全身マッサージを加えた。

遭難者はここまでこの軽装で登ってきて、疲労の蓄積したところを悪天に叩かれて動けなくなってしまったものであろう。今朝山麓を発ったにしては、夏道が雪に埋まっているこの季節にこの高所まで辿り着けるはずがないから、昨日のうちに登りはじめたものと思えるが、今まで保ったのは、遭難者の若さと、倒れた場所が風をさえぎる岩かげであったことや、低気圧の

接近による気温の上昇などの幸運な要素が重なったからであろう。
適切な応急手当が功を奏して、女の頬にかすかながら赤味がさしてきたように見えた。
外界が寒いと体表面から熱をどんどん奪われる。寒気は疲労を増す条件になると同時に、寒気だけでも体温低下の原因となって凍死に導く。体温の維持と体熱の生産が寒気に追いつかなくなれば体温は低下する一方で、遂に凍死に至る。
遭難者の顔にわずかながら生色がよみがえったのは、適切な応急手当と、彼女の若く旺んな新陳代謝が、熱(エネルギー)の消費量に剋った証拠である。さらに保温の効いた場所に移して、濡れた衣服を剝いで、身体を温めてやれば、回復はもっと速まるだろう。
「これ以上ここでは手当ができない。麓へ運ぼう」
「そうだな」
さっそく二人の間に相談がまとまった。影山はブドウ酒を口移しに遭難者にのませると、ザイルで彼女をしっかりと背中に結びつけた。彼の装備でとりあえず不用のものはそこへデポしておくことにした。
その時、真柄はどうしたわけか、影山に対して不思議な妬ましさを覚えたのである。
「途中で代ってやるからな」
「いやこのくらいの重さなら、装備と大して変りないよ」
真柄の申し出を影山はピシャリと断わった。
最初に発見した影山が、遭難者に対してイニシャティヴを握った形になったが、彼の内心を初めによぎった迷惑のおもいはすでにかげもなかった。彼はむしろこの救助作業を嬉々として行なっているようであった。

それがアルピニストの信義ともいうべき山仲間の純粋な連帯感によるものであるとするには、遭難者が美しすぎたのである。

八ケ岳行

1

湯浅貴久子は死のうと思った。身も心も捧げつくしての、一生に一度の恋と信じて、若く熱い、純粋な感情を注いだ相手から、これ以上の冷酷さはない仕打ちで裏切られた貴久子は、相手に対する怨みよりも、高い熱が体を通りぬけて行った後のような虚無感の中にあった。

一人の男が去ったからには、別の男を探せばよいといったふうな、現代娘らしいドライで器用なまねは、貴久子にはできなかった。

情熱というものは定量があり、それがすべて消費しつくされると、人はあらゆるものに対して興味を失う。——と彼女は信じていた。

貴久子の情熱は、あの男、中井敏郎に注ぎつくされ、蕩尽されてしまったから、もう胸の中には何も残っていない。ここにあるのは、湯浅貴久子という名前をもった人間の形骸にすぎない。二十二歳という〝花の盛り〟の外観に、一応美しく装われてはいても、中には何物もない。だからすべてのものに興味をもてない。つまり生きて行く興味を失ってしまったのだ。

湯浅貴久子は、東京のある短大を卒えると同時に、大手町にある〈菱井物産〉に入社した。

菱井物産は業界随一の規模をもつ財閥系の総合商社で、今期の売上高は一兆八千億円、取扱商品はインスタントラーメンから、ミサイルまでにわたると誇る巨大商社である。

社内でどんなつまらない仕事をさせられていようと、〝菱井マン〟であるという一事だけで、社会の信用がちがった。従って入社試験も厳しく、社内にはサラブレッドの秀才英才がひしめいていた。

貴久子も入社にあたって厳正な学科試験を課せられた上に、面接やら身体検査やら、家庭調査の関門をくぐりぬけてきたのである。競争率は、宝くじなみの凄じさであった。

それだけに貴久子のエリート意識はくすぐられた。

彼女の配属された先は、東京本社、機械第一本部、東京機械第一総務部、総務企画第二課、厚生係、社員総務担当という、まことに資本金百三十億、総従業員数一万二千名の巨大組織の毛細管の末端のような部署であったが、鋭角的な近代ビルが群立する日本のビジネスセンターの中でも、ひときわ偉容を誇る菱井物産ビルに出入りする都度、貴久子はエリート意識で胸がふくらむのであった。

女子高校から女子短大と、女の中ばかりで過ごしてきた彼女は、ここで初めて父や兄弟以外の異性に接触した。

中井敏郎は、その最初の異性であった。そして彼が結局、貴久子にとって最後の異性になろうとしている。

中井は私大の名門K大を卒業して、貴久子より三年ほど早く菱井物産に入社した男だった。同じ厚生係であり、貴久子の職場の先輩となった形の中井から、彼女は仕事の手ほどきを受けることになった。

彫りの深いやや虚無的なかげりをもつマスクと、学生時代卓球部のキャプテンだったという笞のようにしなやかな肢体をもつ青年に、学校を卒えたばかりの世間知らずのというより、男というものを全く知らなかった貴久子が容易に傾いていったのは、当然のなりゆきだった。

ましてや相手は一流大学出のエリートで、貴久子の〝社会人〟としての初めての手ほどきをしてくれた〝教師〟でもあった。師や先輩に対するような尊敬の気持は、速やかに女が男へ向ける感情に育った。

中井も、内面の知性のきらめくような貴久子の美貌にかなり惹かれていた。たがいに惹き合う男女が、一日の大部分の時間を一緒にすごしている。磁石と鉄片のように二人は近づき、そして結ばれた。

初めての二人だけのデートで唇を交し、二度目の時に貴久子は最後のものを許してしまった。

「君こそ、この世の中で、僕にとってただひとりの女性だ。ひとには誰でも生まれながらにただひとりの異性がある。でもたいていのひとは、そのような相手にめぐり遇えぬまま二番目か三番目によさそうな相手と妥協してしまうのだ。ただひとりのひとに遇えた僕は幸せ者だよ」

中井は貴久子を狂おしく抱擁しながら、そんな意味のことばを熱にうかされたようにささやきつづけた。

あいにく菱井物産には、結婚した女子社員は自発的に退職しなければならないという内規があった。

二人はかたく将来を誓い合ったが、中井の年齢がまだ結婚には少々若すぎた上に、貴久子もすぐに結婚して家庭に閉じこめられるのは気が進まなかった。

成人式をおえたばかりの若い身には、未来は無限の可能性に充ち充ちているように見え、一流商社のOLとしての身分と、中井というすばらしい恋人を同時に得た青春を、思うさま満喫したかった。

それに旧い伝統をもつ会社のご多分にもれず、菱井物産では社員同士の恋愛をあまり歓迎しない。近代的な社屋や組織に反して、そこで働く人間には依然として幕府ご用商人時代の旧い血と伝習が残っている。

従って二人ともたがいに激しく愛し合っておりながら、その感情の発露を、会社においては隠すような形になった。別に悪いことをやっている意識はなかったが、正式に結婚できる状態に達するまでは、二人の仲が社内に知れることは、おたがいにとって、特に中井の将来にとって確実に不利となるので、彼らの恋は、二人の間だけの〝美しい秘密〟になった。そしてそこに貴久子を陥れる大きなわながあったのである。

2

二人が知り合って二年目の春、中井敏郎の身に〝異変〟が起きた。中井にとっては欣喜雀躍すべき異変であり、貴久子にとっては呪うべき異変であった。

中井が同学の先輩という微かなコネをたぐって、日頃社内では雲上人として足もとにも近寄れぬ重役の家へ年賀に行った時、応対に出た令嬢に見そめられてしまったのだ。

次期社長の最有力候補として社内随一の権勢をもつ、その上田という専務は、一介の平社員にすぎない中井を娘が愛していることを知って愕然とし、おどかしたりすかしたりして思いとどまらせようとしたが、中井と結婚できなければ死ぬとまでいい、事実食事も満足に取らずに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.